

**「試みを通して」(要旨)**  
**聖書箇所：創世記29章1~27節**

**【1】 ヤコブが見ていたもの**

兄エサウの激しい怒りを買ったヤコブは、「ハランへ、私の兄ラバンのところに逃げなさい」(創世記27:43)という母の言葉に従って旅立ちました。長旅を経て、東の国に到着したヤコブは、井戸の傍らでハランの叔父ラバンを良く知る人々に会いました。さらに叔父の娘のラケルが自分のいる井戸にやって来るといふ情報まで得たのです。ヤコブは彼よりも先に井戸の傍にいた人々のことが邪魔に思えたのでしょうか。追い出そうとします。そうしたやりとりを続けている間にラケルが到着しました。するとヤコブは、まるで地元の有力者のように井戸の口を塞ぐ石を転がし、ラケルの羊の群れに水を飲ませるのでした。母の兄ラバンの娘ラケルと出会ったヤコブは彼女に挨拶し声をあげて泣きました。

**【2】 欺かれるヤコブ**

ラバンは事の次第を娘から聞きヤコブを自分の家に迎えました。やがてラバンはヤコブを、親類としてではなく労働者として扱うようになりました。どのような報酬が欲しいか尋ねられたヤコブは、ラケルとの結婚を申し出ました。結婚のために結納金が必要でした。彼は結納金の代わりに7年間の労働を自ら申し出たのです。ラケルとの結婚を夢見るヤコブにとって、この7年の労働はほんの数日のように思える幸せな期間でした。ようやく結婚の日を迎えました。ところが翌朝、ヤコブは自分が欺かれたことを知ったのです。自分のところにいたのはラケルではなく、彼女の姉のレアだったのです。すでに土地の人々を集めた婚姻の祝宴が祝われました。仮にレアとの婚姻を解消すれば、レアの家族を侮辱することになります。当然ラケルと結婚できません。ラバンは「娘」をやる約束しましたが「ラケル」と明言していなかったのです。

ラバンはヤコブがラケルとの結婚を諦められないと見透かした上で、さらに7年労働すればラケルを与える、と提案したのです。ラバンはヤコブを欺き報酬を何度も変えてしまいました(参照創世記 31:7,41)。

**【3】 試みを通して**

思い返して見ましょう。一人で故郷ベエル・シェバを出発したヤコブは、旅の途中、アブラハムの神とお会いする経験をしました。神が自分ととともにおられたことを知ったヤコブは、神が自分の進路を守り、すべての必要を満たして下さると告白したのでした(参照創世記 28:20~22)。ところが井戸の傍らでラケルを待つヤコブの姿は自分の知恵や力にのみ信頼しているように見えます。かつてアブラハムの最年長のしもべが井戸でヤコブの母リベカを見出した時とは対照的です(同 24:10~28)。

叔父ラバンは、ヤコブの良き理解者となることを期待されていましたが、身一つのヤコブを一労働者として不当に扱いました。ヤコブはこうした経験を経て、自分をいつも守り導いて下さるお方が神であると学んだのです(創世記 31:42)。

▷神は私たちを決して無意味な苦しみに遭わせることをなさいません。私たちは試みを通して、神の愛といつくしみを知られるのです。

